

## 第4章 国際会議等の報告

本科研費グループが主催する多層言語環境研究シンポジウムは、海外からの発表を含む国際会議である。これについては第2章でその内容、および本科研メンバーの発表について報告した。この他にも、国内の学会で国際会議であるものにおいて発表した分については、業績一覧を参照されたい。

本章では、研究分担者・研究協力者による、海外（大連、香港、韓国）で開催された国際会議・シンポジウムでの発表について報告する。会議名、発表者、会議の概要、発表タイトルのほか、発表の要旨、あるいは発表に用いたスライドを紹介する。2番目の香港で開催された国際学会での発表は英語によるが、発表要旨は日本語でまとめて紹介した。

### (1) 第1回日本語プロフィシエンシー研究学会国際大会（第12回OPI国際シンポジウム）

■発表者 小林由子（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部・研究分担者）

#### ■会議の概要

2019年11月2～3日に大連外国語大学において開催された。主催は、日本語教育プロフィシエンシー学会および第1回国際日本語プロフィシエンシー研究シンポジウム実行委員会である。初日に基調講演および口頭発表、2日目にパネルディスカッションが行われた。発表者の所属は、大連外国語大学、上海外国語大学、培材大学校、ヤンゴン外国語大学、横浜国立大学、筑波大学、立教大学、同志社大学など多様であった。

#### ■発表タイトル

「中級日本語学習者が日本語を母語とする学生との共修で学ぶ批判的思考—日本語プロフィシエンシーのからの検討—」

#### ■発表要旨

日本人学生との共修授業における中級日本語学習者の、メタ認知能力としての批判的思考の日本語による養成を主眼とした授業における、アカデミックコミュニケーションのプロフィシエンシーについて検討した。多文化交流科目「考え方の技術」を受講した3名の中級日本語学習者を対象に、日本語で30分程度のインタビューを行った。また、授業における日本語タスク遂行度の判断は、授業中のパフォーマンスの観察・提出物・前述した日本語でのインタビューによって行った。その結果、以下の点が示唆された。

- ・ 中級日本語学習者は、正確さや流暢さに問題はあってもその事前知識がない内容につ

いて日本語でのアカデミックコミュニケーションが可能であり一定の成果をあげる  
ことができる。

- ・ 漢語の読み方などの補助など日本語への配慮があれば専門的な内容はある程度理解可能である。
- ・ 具体的なトピックは内容理解とモチベーションに貢献する。
- ・ 独力では達成が困難な日本語での発話や理解が日本人とのグループワークにより可能となる。

## (2) International Society for Language Studies 2019 Conference

■**発表者** 大友瑠璃子（北海道大学メディア・コミュニケーション研究院・研究分担者）

### ■会議の概要

2019年6月20-22日 Open University of Hong Kong で開催された。この研究学会は北アメリカで開催されることが多く、アジアでは日本の秋田で開催された後、香港が2番目となる。大会テーマは、Disrupting and Recreating Beliefs in Language Studiesで、オープニング・セッションでは4名の研究者が香港を言語・パワー・談話・社会実践が交差する場所として考察した。8つのシンポジウムと、アジア太平洋、南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカの120名以上の研究者による90以上の研究発表がこれに続いた。

### ■発表タイトル

Narratives of Japanese-Chinese bilingual BPO workers

### ■発表要旨

本発表は、日本語と中国語のバイリンガル能力とBPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）産業、とりわけオフショア・データ・エントリー・オフィスおよびコール・センターとの関係を検討するものである。情報や物流、人的な流動性の伸展に伴い、日本を含む先進国のサービス部門のある種の仕事は、安価な労働力を求めて国外にアウトソーシングすることが増えて来ている。こうした場所では、言語が生産の道具としてばかりではなく「言語サービス」そのものとして売られている。近年、社会言語学では、アメリカ合衆国などの顧客に電話で対応するインドやフィリピンのカスタマー・サービスに注目し、言語と仕事の特異で矛盾を含む関係を指摘している。しかし、非英語話者向けの言語サービスの研究は限定的で、日本では在外のコール・センターをBPO産業の一部とは考えない傾向がある。本発表では、中国語・日本語のBPO産業の概説を行い、コール・センター勤務の経験者や上司から収集したナラティブの分析の一部を紹介する。

■発表者 サヴィヌィフ・アンナ（北海道大学大学院博士課程院生）

### ■会議の概要

2023 年 9 月 22 日に韓国安山市漢陽大学校国際文化館において開催された。主催は漢陽大学大学院日本語文化学科 BK21FOUR「地域文化の創出と人文活動方法論を構築するための日本学教育研究チーム」で、本科研チームも共催者となっており、研究代表者が基調講演をオンラインで行った。漢陽大学、北海道大学、仁川大学、北海道教育大学、サハリン郷土博物館の研究者が発表者として参加した。翌日は、安山市の移民在住地域でフィールドワークを実施した。

### ■発表タイトル

「モノリンガル社会におけるトランスランゲージングに関する信念～小学生に教える教師の考え～」

### ■発表スライド

1.



2.



3.



4.





13.

### 理解を促すテクニック

- 絵
- ジェスチャー
- 他の学習者による説明、訳
- 簡単な目的言語
- 意味を日本語で当ててもらおう
- 英語で似たような発音をする単語で説明する(第3の言語使用)

14.

### トランスランゲージングは良い？悪い？ 基になっている信念

- おもしろい、条件がゆるい(読書量も、トランスランゲージングの量も、年齢、年齢、人数、レベル)
- 日本語を習得する(日本語、英語)に有利
- トランスランゲージングを習得するための
- トランスランゲージングの必要性は低い
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない
- トランスランゲージングは、必ずしも必要ではない

15.

### トランスランゲージングに関する考えの相違点

- 年齢→年齢が上がるにつれ、トランスランゲージングを使うことが増える教師(文化や文化説明、AIと異なる人(言語能力の基礎、自分で調べることができ、トランスランゲージングの行き先(目的、目的))
- 母語、第二言語、第三言語、母語の基は言語能力の表
- 言語的要素の習得(態度、コミュニケーション能力)
- 韓国と日本の違いは見つかっていないが、言語環境の違いはあると明らかになった
- 「単語レベル」と「文レベル」でトランスランゲージングを使うことに対する考えは教師によって違う

16.

### 考察や将来の研究

- 意外にも全員は肯定的だった
- その理由は、多くの教師は、トランスランゲージングに対して抵抗がなかった
- トランスランゲージングの目的は、コミュニケーションツール、学習者の心のケア、概念の理解(目的、目的)の理解を促すことである
- 実践の状況(自分の子どもが多次言語習得する)での影響を調べる
- 教師の信念が変化した場合、その信念は必ずしも認識される
- トランスランゲージングの言語能力の影響は明らかになっていない(今後の研究で確認する(特に目的言語としての英語・第二言語))



## あ と が き

私たちの共同研究では、これまでトランスランゲージングを中心に据えて研究を展開してきた。しかし、この概念にも限界が指摘されている。トランスランゲージング研究では個別の言語種の存在を否定している。しかし、トランスリンガルなコミュニケーションの記述や解説には、相変わらず個々に名づけられた言語名の使用が不可避である。トランスランゲージングには、言語的マイノリティの異議申し立ての側面があるが、トランスランゲージングの教育利用を主張する研究者もこうした限界に気づいており、トランスリンガルな存在としての少数言語・文化の背景を持つ学習者のトランスリンガルアイデンティティを認めることは重要であるが、同時に彼らが外界に存在するモノリンガルの言語種認識と折り合いながら生きていく必要があることも教える必要があると認めている。

フェルディナン・ド・ソシュールが指摘したように、言語は概念と音との結びつきで成り立つが、概念と音の結びつきは恣意的である。オノマトペはその恣意性が低いと考えられているが、それでもブタは日本語でブーブー、英語でオウインクオウインクと鳴く。そこに類似性を感じるのは難しい。多様性は、形態・統語や、概念の切り分けに広がる。その結果、多くの言語種が世界中に散らばり、異なる言語話者間の意思伝達は円滑に進まない。数多の言語が存在する様子はバベルの塔に例えられ、言語は意思伝達を目的として発達したはずなのに、言語種の存在で意思伝達が困難になっているというアンビバレンツが生まれている。

言語は現代のグローバル社会における諸刃の剣であり、意思伝達の障害とも、調和をもたらすツールともなり得る。未曾有の世界危機を全人類の協力によって解決しなければならない現代において、言語的障壁はこれまでも増して大きな障害と言える。第二言語教育の目標は、この問題を克服し、協働的な取り組みに貢献できる人材を育成することだと言える。ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)では、次世代に育成すべき言語能力として、mediation(仲介)能力をあげている。この能力について、欧州評議会はCEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)補遺版で、「CEFRでは、4技能からの脱却として、コミュニケーションの四つのモード、つまり受信、やりとり、発信、仲介の一つとして、仲介が言語の教育と学習に導入された」(Council of Europe, 2018, p. 33)と述べている。

CEFRのmediation(仲介)にも限界があると思われる。CEFRで語られるmediation(仲介)は受信・やりとり・発信とならぶ、分類としてのコミュニケーション技能の一つである。また、その説明は能力記述文の集積で表現されており、CEFRの目的からそうなることは必然であるが、言語発達の結果として、あるいは第二言語学習の目標として観察可能な行動である。しかし、単なる通訳・翻訳技能だけを指すわけではないことも同時に示唆しており、mediation(仲介)概念にはさらに理論的な精緻化が必要と思われる。

Rebecca Oxford は、The Language of Peace: Communicating to Create Harmony (Oxford,

2013)の中で、言語の使用を通じて暴力を平和に変える手段を模索した。彼女は、外国語学習方略の専門家として長年研究を重ねてきたので、平和教育への転向に驚いた読者も多かったに違いない。しかし、それはそれほど驚くべきことでもない。彼女は応用言語学者だが、その興味は言語よりは人間にあった。彼女の方略分類の独自性は、情緒の方略および社会的の方略に見られる。彼女の学習方略研究は、人々の間に調和のとれた関係を築きたいという衝動に支えられていたと言える。彼女はこの著書の中で、「問題解決のための仲介」と対比させて「トランスフォーマティブな仲介」を取り上げている。

問題解決型の仲介は、仲介者を通じた交渉による紛争解決を目的としている。一方、トランスフォーマティブな仲介では、当事者が紛争に対する見方を変えることを支援する。当事者は問題を再構成し、感情を制御しながら解決策を模索する必要がある。仲介者の役割は、当事者の成長を促進し、当事者が自ら紛争を解決できるように支援することだと言う。Oxfordは、言語教育を通してこうした資質を高めることができると考え、これを目指すべきだと主張する。

今後の多層言語環境研究では、トランスランゲージング的言語事象から mediation(仲介)場面を抽出し、mediatorship(仲介者意識)を考察していきたい。

この研究では、次の二つの目的がある。

(1) トランスランゲージング的対話における mediation 場面を取り上げ、バイリンガル教育、言語政策、理論言語学、外国語学習者論、教育学、応用言語学、心理学の視点から mediatorship を包括的に考察する。

(2) 考察された mediatorship の組成・特性に基づき、実際の言語使用場面・教育場面で mediatorship をどのように育成・応用していくか提言する。実際場面として、英語教育、日本語教育、留学生との共修授業、観光人材育成、継承語教育、外国人向け情報提供、インターネット空間などを考えている。

具体的には、バイリンガル教育的考察(トランスリンガルアイデンティティ)、言語政策的考察(言語簡易化)、理論言語学的考察(言文不一致言語のトランスランゲージング)、学習者論的考察(トランスランゲージング的態度)、教育学考察(バーチャル空間での多言語使用)、応用言語学的考察(教室内第二言語習得における母語の役割)、心理学的考察(複言語使用意欲)の視点から、mediatorship(仲介者意識)の包括的分析を行い、英語教育、日本語教育、留学生との共修授業、観光人材育成、継承語教育、外国人向け情報提供、インターネット空間などさまざまな場面での mediation の様態と mediatorship 育成の方法を示唆していきたい。

以上を今後の抱負として、本科研成果報告書のあとがきとしたい。

令和6年3月

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 特任教授  
河合 靖



## 業績一覧

\*は本報告書の第4章に詳細を報告している.

### 【著書】

小林由子 (2023) 国際共修授業—多様性を育む大学教育のプラン (青木麻衣子・鄭惠先編著・第4章「多様性を資源とする批判的思考の育成」) 明石書店

### 【論文】

SAKAI Yuko (2020) Learners' Use of first language in small group discussions in a Japanese EFL class: A sociocultural perspective *Japan Journal of Multilingualism and Multiculturalism* 26(1), 83-106 (査読あり)

飯田真紀 (2021) 広東語の"m4hai6/mai6...SFP"構文, 『人文学報 (東京都立大学人文科学研究科人文学報編集委員会 編)』 517(12), 145-162

佐野愛子 (2023) 「トランスリンガルな文学」と教育におけるその可能性, 『立命館文学』 683, 1-14

SUGIE Satoko (2023) The AI-supported instructional design in PBL integrating Chinese language learning and multimedia creation, *Proceedings of the 31st International Conference on Computers in Education*, 746-752. (December 4-8, 2023) (Kunibiki Messe, Matsue, Shimane, Japan) (査読あり)

IIDA Maki. (2023) The learning of Cantonese as a foreign language at Japanese universities. In Siu-lun Lee (Ed.), *The Learning and Teaching of Cantonese as a Second Language*. London/New York: Routledge, 119-139. [査読あり]

杉江聡子. (2024) 観光・情報メディア・外国語教育を統合した PBL の教授設計の探究, 『複言語・多言語教育研究』 11, 62-77 (査読あり)

佐野愛子 (2024) リテラシー教育におけるトランスリンガルな文学の意義—Translingual Identity Text の実践を支える理論的枠組み—, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 35-54

飯田真紀 (2024) 言文不一致言語の外国語教育—日本語を母語とする香港広東語学習者を例に—, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 55-70

大友瑠璃子 (2024) 多層言語環境における言語簡略化—簡約日本語のディスコース計画—, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 71-117

酒井優子 (2024) 意思決定タスクにおける協働的対話の特徴—社会文化理論の視点から—, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—

トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 119-137

河合靖・山田智久・小林由子 (2024) 高度バイリンガルのトランスランゲージングと日本人英語学習者の反応, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 139-180

三ツ木真実 (2024) 多層言語環境における学びと学習者の認識—認識の変容とトランスランゲージング—, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 181-196

杉江聡子 (2024) 外国語教育におけるマルチモーダルなコミュニケーションと AI の活用, 『科研 (B) (課題番号: 19H01276) 多層言語環境における第二言語話者像—トランスランゲージング志向の会話方略—研究成果報告書』, 197-221

#### 【学会発表】

KAWAI Yasushi (2019) Making Sense by Switching Codes in Tandem Learning 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

SANO Aiko (2019) Translanguaging: Its theoretical evolution and possible applications to language teaching in Japan 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

YOKOYAMA Yoshiki (2019) How is translanguaging assessed and measured? 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

飯田真紀 (2019) 広東語文末助詞“添”(tim1)の発話行為用法の獲得 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

山田智久 (2019) タンデム学習において学生は何に着目していたのか?—日英バイリンガルクラスでの実践から— 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

\*小林由子 (2019) 中級日本語学習者が日本語を母語とする学生との共修で学ぶ批判的思考—日本語プロフィシエンシーのからの検討— 第1回日本語プロフィシエンシー研究学会国際大会 (第12回 OPI 国際シンポジウム) (大連外国語大学) (国際学会)

\*OTOMO Ruriko (2019) Narratives of Japanese-Chinese bilingual BPO workers, *International Society for Language Studies*, (Open University of Hong Kong) (国際学会)

OTOMO Ruriko (2019) Discourse of “Easy Japanese”: A preliminary language policy study 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館

- 杉江聡子 (2019) AI を活用した多言語コミュニケーションの質的分析 ELAN を用いた解析を事例として 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館
- SAKAI Yuko (2019) Learners' use of first language in small group discussion in a Japanese EFL class: A Sociocultural Perspective 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館
- SAKAI Yuko (2019) Learners' use of first language in small group discussion in a Japanese EFL class 全国英語教育学会 第45回 弘前研究大会, 2019年8月, 弘前大学
- MITSUGI Makoto (2019) English Learning in a Multilayered Linguistic Environment and Development of the L2 Motivational Self-System 国際シンポジウム「アジア多層言語社会と複言語主義」2019年11月3日, 札幌, 北海道大学学術交流会館
- 大友瑠璃子 (2020) 映像メディアを使つての授業実践—社会言語学の場合— 公開学習会「トランスリンガルな文学を読む」2020年11月28日(オンライン開催)
- 佐野愛子 (2020) トランスリンガルな文学—温又柔氏の『真ん中のこどもたち』 公開学習会「トランスリンガルな文学を読む」2020年11月28日(オンライン開催)
- 小林由子 (2020) 大学での共修授業におけるメタ認知と批判的思考の養成 日本教育心理学会第62回総会 (ポスター発表)
- 杉江聡子・三ツ木真実 (2021) タンデムラーニングにおけるトランスランゲージングを考える 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- 飯田真紀 (2021) 中国語と日本語の<ジャーナイカ> 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- 小林由子 (2021) 多層言語環境としての日本の大学と日本語学習者の「当事者性」 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- 山田智久 (2021) タンデム学習での使用言語を学習者はどのように決定しているのか 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- TAM Chui Ling & KAWAI Yasushi (2021) Classifying translanguaging interactions in YouTube videos and Podcast audio files. 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- 酒井優子 (2021) 協働学習型意見交換タスクにおける学習者の使用言語と機能の量的研究 多層言語環境研究国際シンポジウム「多様性と言語」2021年2月21日 (オンライン開催)
- 杉江聡子 (2021) ハイフレックス型国際協同学習のデザインと学習成果—アイヌ文化の展示解説を事例として— 第9回 JACTFL シンポジウム「外国語教育の未来を拓く: 世界とつながる複数外国語教育の展望」 (オンライン開催)
- SANO Aiko, YAMADA Tomohisa, KAWAI Yasushi (2022) Translanguaging in L2

- teaching: Identity and mediation 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- 飯田真紀 (2022) 広東語の談話標識"唔知口尼 M4zilne1"と日本語の応答表現「さあ(ね)」 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- OHTOMO Ruriko (2022) Discourse of "Easy Japanese": An update 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- MITSUGI Makoto (2022) The role of personal learning context in L2 motivation: Focusing on the emergence of new values and beliefs 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- 酒井優子 (2022) 意見交換タスクに見られる scaffolding と言語使用のあり方 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- 杉江聡子 (2022) 母語が異なるマルチリンガルの作品共創におけるマルチモーダルコミュニケーションを探る 多層言語環境研究国際シンポジウム「言語的変容の過去・現在・未来」2022年3月12日(オンライン開催)
- \*サヴィヌィフ・アンナ (北海道大学・研究協力者) (2023) モノリンガル社会におけるトランスランゲージングに関する信念～小学生に教える教師の考え～ 2023年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成Ⅱ」2023年9月22日・韓国安山市漢陽大学国際文化館
- 大友瑠璃子 (2023) 多層言語環境における言語簡略化：簡約日本語を通して見えてくること 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 佐野愛子 (2023) トランスリンガル・アイデンティティ・テキスト [実践報告] 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 飯田真紀 (2023) 言文不一致言語の外国語教育—日本の広東語学習者を例に— 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 酒井優子 (2023) 意見交換タスクにみられる協働的対話の特徴 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 河合靖 (2023) 多層言語環境社会への適応—トランスランゲージング場面に対する日本人英語学習者の態度— 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4・5日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 小林由子 (2023) 国際共修授業における日本語母語話者の日本語使用意識 多層言語

- 環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月5日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 三ツ木真実 (2023) 小樽商科大学 多層言語環境における学びと学習者の認識: トランスランゲージングと認識の変容に着目して 多層言語環境研究シンポジウム「多層言語環境社会における Communication と Mediation」2023年11月4・5日, 札幌, 北海道大学クラーク会館
- 杉江聡子 (2023) 観光教育×情報教育×外国語教育の統合型 PBL の実践, 成果と課題 北海道大学研究集会 2023: ポストコロナ時代の言語教育におけるオンライン授業と翻訳 AI・生成 AI への対応に関する研究, 2023年8月29-30日, 北海道大学 [https://www.hokudai.ac.jp/events/pdf/230727\\_event2.pdf](https://www.hokudai.ac.jp/events/pdf/230727_event2.pdf)
- 杉江聡子 (2023) 複言語話者としてのコミュニケーションに生成型 AI を活用するには 多層言語環境研究科研—研究打合せ会, 2023年7月12日, 札幌市旧永山武四郎邸
- 酒井優子・志村昭暢 (2023) 北海道教育学会授業実践フォーラム「協働学習型意思決定タスクにおける学習者の発話機能の分析」2023年11月12日, 北海学園大学
- 杉江聡子 (2024) 生成 AI の時代に「中国語を教える」とは「何のために, 何を, どうする」ことかを考える 2023年度中国語教育学会第3回研究会. 2024年2月24日, オンライン発表
- 杉江聡子 (2024) 学習者と共創する中国語教育を考える—協同学習としてのマルチメディア教材開発の可能性 『第21回 e-Learning 教育学会大会』2024年3月16日, 沖縄大学. <https://peatix.com/event/3853192>

#### 【招待講演, ワークショップ, その他】

- IIDA Maki (2019) Cantonese as a Foreign Language in Japan: Current Situation and Problems. *International Symposium on Teaching Cantonese as a Second Language*, 18 October 2019, The Chinese University of Hong Kong. (国際学会 / 招待講演)
- 河合靖 (2020) 言語学習経験史と外国語学習観—理想の L2 自己を求めて— 北海道英語教育学会(HELES) 第21回研究大会 (オンライン開催) (招待講演)
- 河合靖 (2023) 多層言語環境研究の歩み 2023年度国際学術大会「地域文化の理解と日本学研究ネットワーク形成Ⅱ」2023年9月22日・韓国安山市漢陽大学校国際文化館 (オンライン講演) (国際学会 / 招待講演)

2019年度～2023年度 科学研究費補助金  
基盤研究(B)(一般) (課題番号:19H01276)  
研究成果報告書  
多層言語環境における第二言語話者像  
—トランスランゲージング志向の会話方略—

---

発行 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院  
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

令和6年3月 発行  
印刷 北海道大学生生活協同組合 印刷・情報サービス部  
電話/FAX : 011-747-8886

---